中國文學報　第八十一册

琉球本『人中畫』の成立

――併せてそれが留める原刊本の姿について――

木津祐子
京都大學

はじめに

清代琉球久米村（現那覇市久米）の官話通事は、明代以降、琉球に移住した中國人の子孫（閩人三十六姓）が母體となって擔われ、彼ら移民たちの居住地名を取って「久米人（くにんだ）」、「唐榮」とも呼ばれる。「唐榮」という呼稱は、元來は今で謂う所の「唐人街」を表す「唐營」と呼ばれていたものを、後に嘉き字に改め、漢文脈における自らの呼稱として用いたものである。この久米村通事の活動は、那覇や福州での外交や勉學、さらに北京での朝貢業務など多種多様で、彼らが編纂する官話學習の爲の各種「通事書」も、その言語活動の多様性を鮮やかに映し出す。琉球の久米村通事が通事書を編纂する上での最大の原則は「實用」であり、テキストの細部にまで史實の裏付けが見られること、さらに編纂作業は、恐らく家ごとの學問傳承を基盤にした一定の閉じた集團内で行われ、それが當該通事書で使用する「官話體系」の性格に反映していたという事實は、琉球の通事書を考察する上で、必ず押さえておかねばならない重要な特質である。[1] この特質を踏まえ、やはり通事書の一つである『人中畫』の成立について、私見を述べたいと思う。

一　『人中畫』について

『人中畫』は、明末清初に成立したと考えられる短編の小説集である。「玄」字を缺筆にしない版本があることから、康熙以前には成立していたと考えられる。現在、嘯花軒本（繁本）[2]と泉州尙志堂本・植桂樓刊本（簡本）[3]の繁簡二系統の版本が存在することが知られ、そのうち、「乾隆庚子（一七八〇）新鐫」と記される泉州尙志堂本は、日本

の内閣文庫に二本が所藏されるなど、所藏は比較的多い。植桂樓刊本は、第二節に後述する『中國話本大系』「珍珠舶等四種」（江蘇古籍出版社、一九九三）所收排印本に校訂者の趙伯陶氏の記した解題によると、中國國內には所藏は見られず、大連圖書館藏『海內奇談』にその照鈔本が見られるのみと言う。そこには「乾隆乙丑（一七四五）新鐫」とあるとのことで、それによるならば、尙志堂本よりも三五年早くに公刊されたことになる。しかし、嘯花軒本の繁本系版本は、現在所藏が知られるのは、現中華書局資料室藏書とされる一本のみである。

それぞれの構成は、嘯花軒本が、「風流配」「自作孽」「狹路逢」「終有報」「寒徹骨」の五篇、植桂樓刊本が、「終有報」「寒徹骨」「狹路逢」の三篇、尙志堂本はそれに『二刻拍案驚奇』の「女秀才」を加えた四篇から成る。④植桂樓刊本と尙志堂刊本は同じテキストである。嘯花軒本（繁本）と泉州尙志堂本（簡本）は、話のプロットは共通するものの敍述の繁簡に大きな差が有り、趙伯陶氏の指摘の通り簡本は繁本のダイジェスト版のような體裁である（趙氏の當該指摘は、第二節所引の解題を參照されたい）。

各篇は典型的な才子佳人小說の筋立てを取り、短編ながらも、勸善懲惡、五倫道德、因果應報などの中華的人生訓が簡潔に生き生きと描寫される佳作揃いである。前述の趙伯陶氏の評語を以下に引用する。

> 縱觀《人中畫》，五篇故事於酒、色、財、氣皆或多或少有所涉及，人物則或才子、或才女、或商人、或儒生、或市井俗輩、或官宦子弟均有描寫。構思既巧，文筆尙佳，將五種不同類型的故事納於一書，可見編者用心亦苦。在諸多話本（包括擬話本）集中，《人中畫》當屬中乘偏上之品。
>
> （『人中畫』部分五頁）

なるほど、琉球の久米村通事にとって、中華の禮節を學ぶ上で恰好の教材と見なされたのも故無しとしない。確かにこの話本小說は、琉球では淸末に到るまで長く傳承されたが、⑤注目すべきは、久米村通事が『人中畫』を讀むに當たっては、中國刊本の白話文體を徹底的に官話文體に翻譯した官話本テキストを用いたということである。通事にとって、話本小說の「白話」のままでは「官話」習得材料

嘯花軒本（繁本）『人中畫』「自作孽」	琉球寫本『人中畫』「自作孽」
1考期將近、他急得無法。	1考的日子要到了、他急得沒有方法。
2有人指點他說、官井頭黃輿秀才、爲人淳厚、不甚論利、他處你去求、或者還好說話。	2有一個人指點他說、官井頭地方有個黃輿秀才、做人忠厚。銀子借人家、也不論甚麼利錢、你去求他、或且借你也論不定的。
3汪費聽了、滿心歡喜、忙忙寫了個門生帖子來拜黃輿。	3汪費聽了、滿心歡喜起來、忙忙寫了個門生的帖子來拜黃輿。
4黃輿留坐道、汪兄下顧、想是爲考事要學生出保結了。	4黃輿留他坐說、你到我家來、想是爲考試的事、要我出保結麼。
5汪費道、門生寔寔爲此事而來、但只是些須薄禮、不足充紙筆之敬、要求老師念門生赤貧、用情寬恕。	5汪費說、我寔寔爲這個事來、一點的薄禮、不堪奉敬、要求老先生念我家裡苦、替我出個保結。
6黃輿說、斯文一脈、成就人才是好事、禮之厚薄、那裡論得、但憑汪兄賜敎罷了。	6黃輿說、讀書的人都是一樣、總成你是個好事、禮物厚薄、那裡論得、憑你怎麼樣就是了。

としてふさわしくないと思われたのであろう。文脈や小說としての價値意識（勸善懲惡や五倫道德など）はそのままに、言語形態だけをそっくり「官話」に置き換えたのは極めて興味深い。

以下に擧げるのが、實際の官話文體への翻譯實例である。取り上げるのは、「自作孽」の一節である。左が琉球寫本（京都大學文學部藏）⑥、右が嘯花軒本である。對照の便を考慮し、一文ごとに區切って配列した。

比較すると明らかなように、繁本の1「考期」を琉球本は「考的日子」にするなど、口頭で語ってそのまま意味が通じるように書き換えを行っている。また繁本2「爲人淳厚、不甚論利」については、「銀子借人家」という語を補

うことによって、文脈が耳で聞いてより分かりやすく工夫されている。6の「斯文一脈」は、原文の、口頭ではまず使わない「斯文一脈」を「讀書的人」という同義語に置き換えることで簡潔な表現を目指したものだし、同じく6「憑汪兄賜敎罷了」を「憑你怎麽樣就是了」に改めるに至っては、もとの白話の常套語的禮儀表現を一切排除し、極めてフランクな日常語にしたてている。また、5では「但只是些須薄禮、不足充紙筆之敬、要求老師念門生赤貧、用情寛恕」（この些かの薄禮では先生の紙筆の用意にも足りぬほどのことですが、どうか私が赤貧であることをご考慮くださり、特別なご寛恕をお願い申し上げます）を、婉曲な敬語表現を極力廃して、「一點的薄禮、不堪奉敬、要求老先生念我家裡苦、替我出個保結」（少々の薄禮は差し上げるのも憚られますので、どうか先生には私の困窮をご考慮の上、私の爲に保證金を立て替えてくださいませ）と、文脈を考慮した上で、發言の含意を單刀直入に表現するなど、積極的な口語表現に置き換えているのが見て取れよう。琉球通事達が、いかに高度に白話文體に習熟し、なおかつそれが「官話」（口頭語）とは別物であると理解していたかを示す好例である。

朴在淵氏の近年の研究によると、『人中畫』は、朝鮮の完山李氏『中國小說繪模本』（英祖三十八年序：一七六二）と、尹德熙『小說經覽者』（一七六二～六三頃成書か）に書目の記載があり、同時に朝鮮語にて翻譯された可能性が有るという。⑦作品のスピード感有る物語展開と、各卷がもつ明快な主張、それによる大團圓は、廣範な讀者、特に境外の中國語學習者に歡迎されるのも怪しむには足らない。殘念ながら、朝鮮語版『人中畫』は、『伽藍李秉岐原藏朝文書目』内に「寒徹骨」の名が見える以外、現在までに現物は發見されていないとのことであるが、⑧朝鮮・琉球の兩地において、かたや朝鮮語に、かたや官話文體へと翻譯されつつ傳承された事實は極めて興味深い。拙論「通事の「官話」受容――もう一つの「訓讀」――」（中村春作等編『續・「訓讀」論――東アジア漢文世界の形成』、勉誠出版、二〇一〇年）で論じたように、長崎での話本小說の傳播は、枠組みと言語は中國製のまま、その枠組みに長崎獨自の文脈を流し込む形で換骨奪胎を遂げていた。琉球においては白

話の官話文體への翻譯、さらに朝鮮における朝鮮語への翻譯などと總合的に考え合わせると、話本小說が東アジア諸地域へ傳播し、各地で様々に受容される事象には、近世の漢文圈（官話圈）[9]が示す、重要な文化史的役割が潛んでいると豫測される。それらの問題については、今後改めて考察を加えていきたいが、いまはこの『人中畫』官話翻譯について檢討していくこととしたい。

二　琉球本『人中畫』が殘す原本の姿

管見の限り、現在所藏が確認される琉球本『人中畫』は以下の通りである。

A：天理大學圖書館藏『人中畫』五卷
「風流配」「自作孽」「狹路逢」「終有報」「寒徹骨」

B：京都大學文學部圖書館藏『人中畫』四卷（敦厚堂の印記有り）
「風流配」「自作孽」「終有報」「寒徹骨」（付「白姓」一卷）

C：東京大學總合圖書館藏『人中畫』四卷（武藤長平氏舊藏本）
「風流配」「狹路逢」「終有報」「寒徹骨」
「終有報」に「長平之印」、「寒徹骨」に「武藤」。他は印記無し。「狹路逢」のみ、明らかに他の三冊と板型を異にする。

D：八重山博物館藏『人中畫』一卷
「自作孽」のみ。
書型・筆寫の手が、C東大本の「風流配」に似る。[10]

本稿では、Bの京大本を用いて考察を加えるが、必要に應じてC東大本・A天理本にも言及する。京大本は「狹路逢」のみを缺くが、圈發による聲點と語注や音注をもち、保存狀態も良好である。また、京大本は、同帙に同じ板型と同一の筆寫者による『白姓』を封入するが、そのことが示す書誌的問題については、本稿後半で再度取り上げることとする。

さて、中國版話本小説『人中畫』に大きく分けて繁本と簡本の二系統の版本が見られることは前述のとおりである。現在、（1）嘯花軒本（繁本）と（2）泉州尙志堂本（簡本）の版本二種が、それぞれ以下に記すとおりに排印または影印出版されており、參照に便利である。

（1）嘯花軒本（繁本）：現中華書局資料室藏。路工編『明清平話小説選』第一集（古典文學出版社、一九五八）、及び『中國話本大系』「珍珠舶等四種」（江蘇古籍出版社、一九九三）に、排印出版。

（2）泉州尙志堂本（簡本）：內閣文庫（國立公文書館）藏。乾隆四五年刊本。いま『古本小説集成』（上海古籍出版社、一九九〇）、『古本小説叢刊　第三六輯』4（中華書局、一九九一）に影印出版。

『中國話本大系』「珍珠舶等四種」（江蘇古籍出版社、一九九三）に記された趙伯陶氏の解題によれば、「繁本」が「簡本」よりもすぐれている理由として、所收の話本が二本多く掲出されること以外に、修辭の上からも前者が後者より優れており、簡本は、恐らく繁本を短縮させたダイジェスト版であろうと論ずる。諸本を校勘した上での趙氏のこの判斷は、十分に説得力がある。

それと同時に、この趙氏解題には、もう一點、極めて興味深い指摘が見られる。それは、概ねプロットは共通するはずの繁本と簡本だが、唯一「寒徹骨」の末尾に、大きな出入が見られるというものである。些か長文にわたるが、下にその指摘を引用する。

注目すべきは、嘯本『寒徹骨』の末尾の一段が尙本『柳春蔭』（引用者注：『寒徹骨』の主人公名、篇名を諸篇の主人公名で代用するもの）よりも文字數が少なく、內容も完全には一致しない點である。考證の結果、『寒徹骨』は、繁本では、全編の末尾に置かれており、その最後の一葉分の字體が亂雜で、筆跡にも力無く、全篇の刻工の格調とは明らかに異なっている。間違いなく、この嘯本を印刷するときに、藏板の最後の一二枚が損壞或いは失われるという狀況があって、新たに一枚の板を掘り起こしたのであろう。今日見られる最後

の一板が、文字は版木全體にきっちりと滿たされて、最終行の最後の一字のみ空格で殘されているという體裁は、明らかに原刻のままでは有り得ない。（失われた最後の一、二板を）新たに彫り起こしたときに、一板もしくは半板分を餘分に彫る勞を惜しみ、こまかく較量した上で、餘分を削り文字を壓縮し、ちょうど一板分の文字數で收まるように、適當に結末をでっち上げたために、締め括りの「故に寒徹骨と曰う」という言葉に何の脈絡も必然性もない內容にしてしまった。さらに「孟尙書」という呼稱もそれまでの本文には一切登場しておらず、重刻時のこのいい加減な仕事ぶりは、功勞を灰燼に歸してしまう結果となっている。一方、植桂樓刊本などの簡本『人中畫』は、簡略版を作るに際して嘯花軒本の原刻本を底本としていたので、その部分において差異が生じている。いま尙本「柳春蔭」の末尾の兩者で差異の生じている一段を拔き書きして、讀者の參考に供したい……（引用者注：いま省略、下に別途對照表で表示する）……。この一段は、確かにダイジェスト版ではあるが、嘯本の當該段よりもずっと本來の面目に近いことは、この簡本を繁本（嘯本）の本文と比較すれば明らかである。[11]

以上の趙氏の指摘の要點を示すと、以下の二點となる。

・現行「繁本」『寒徹骨』は、最末尾の版木が損失したことによる補刻が行われているが、失われた結末を無理に版木一枚分に收めるように捏造したため、話が落着せず、登場人物名も全編の體例に合致しないという、でたらめな重刻となっている。

・現行「簡本」での當該部分は、このでたらめな重刻本ではなく、原刊本に基づいてダイジェストを行っているので、結末の文脈は本來の面目を保っている。

この指摘を確認するために、繁本と簡本の兩者の對照表を下に記す。對比に便利なように、各文を區切って箇條書きに記した。

繁本には、簡本の(2)(3)(5)(10)に相當する部分が無い。簡本(10)に見える「劉恩」という人物は、紆餘曲折を經る主人公に、終始變わらぬ忠義を以て事えた柳家の老使用人である。出世した柳春蔭がその恩に感じ、劉の子に學問を授けて擧人にまでしたというこのくだりを缺くのは、小說の結末として大きな缺陷と言わざるを得ない。反對に、繁本(6)で柳春蔭が「翰林から侍郎に昇った」とする記述は、原繁本に存在するならば簡本も當然襲用するはずの榮譽の記錄であ

表1　簡本・繁本對照表

◎嘯花軒本（繁本）「寒徹骨」

(1)自家拜別了商尙書，竟回貴州，將父母棺櫬移葬。
(2)〔缺〕
(3)〔缺〕
(4)貴州有司皆來祭奠，好不光耀。
(5)〔缺〕
(6)葬事已畢，回朝覆命。後來柳春蔭由翰林直做到侍郎，他不貪仕宦二年間，
(7)(8)卽告終養，回紹興侍奉商尙書夫妻。二人終天之後，哀慟居喪。孝服滿後，與孟夫人另卜宅，與孟尙書家相鄰，撫育孟公子成人。
(9)後生二子，俱成偉器。其功名顯大，
(10)〔缺〕
(11)皆貧賤能守而成，故曰寒徹骨。

◎尙志堂本（簡本）「寒徹骨」

(1)自家拜別商尙書，回貴州營葬。
(2)此時朝廷旨意，久到貴州，柳府產業，皆淸理交還。
(3)劉恩先前到家，已暗暗將先老爺並夫人與至親骸骨俱已收斂。
(4)春蔭一到家，滿城官員皆來迎賓。
(5)春蔭重新掛孝開弔。
(6)將父母安葬事畢，分付劉恩掌管產業，遂進京覆命。
(7)後在紹興住家，直待商尙書謝世，服過三年喪。
(8)扶持孟小姐兄弟登了科甲，方與孟夫人回貴州。
(9)生了二子，俱繼書香，自家官至尙書，
(10)扶持劉恩一子中擧人。
(11)諺云，不是一番寒徹骨，怎得梅花撲鼻香。詩曰，……。

るが、それが簡本に全く存在しないからには、やはり現行繁本のでっち上げと考えざるを得ない。また、繁本(7)(8)では、それまでの本文には一度も用いられない「孟尙書」という人物呼稱を草卒に登場させる不注意を見せる。そして、物語の締めくくりたる(11)も、繁本の「皆貧賤能守而成，故曰寒徹骨」という結語では、趙氏が述べる通り、物語全體を受け止める締め括りの言葉には程遠い。

一方、この當該部分を、琉球寫本『人中畫』で見てみると、プロットは簡本（尙志堂本）と一致し、なおかつより詳細な敍述を見せて、現行の嘯花軒本とは大きく異なることが見て取れる。つまり、琉球寫本が基づいた底本は嘯花軒本ではなく、末尾が缺損する以前の繁本系テキスト、つまり原刊本『人中畫』に近いテキストであったと考えられるのである。以下に、琉球寫本『寒徹骨』の當該部分を、簡本と比較する形で對照させてみる（表2）。

表1の「簡本・繁本對照表」と表2を比較すると、琉球寫本「寒徹骨」のプロットが簡本ときれいに一致し、敍述はより詳細なものとなっていることは明らかであろう。表中の下線部分に注目すると、簡本(4)で「滿城官員皆來迎賓」と總括された內容を、琉球本では「撫院、按院、知府、縣官，沒有一個不來迎賓，十分榮華」と一つ一つ官衙を列擧して、繁本の本來の面目を彷彿とさせる。琉球本(3)の「都停在丁房裡頭」、(8)「料理舊時產業」、(9)の「轉陞文華殿大學士」は簡本には存在しない敍述であるが、これらを琉球人が獨自に付加したとは考えがたい。恐らくは原刊本「寒徹骨」に元々有った描寫の內、簡本がダイジェストに際して削除したものを、琉球本はそのまま（官話文體に置き換えて）踏襲した形跡を示すのであろう。もちろん、繁本で脫落した劉恩とその子の顚末も、（子の數が琉球本では「二個」とされる違いは有するものの）[12]きちんと言及され、最後は「寒徹骨」の言葉の由來を述べた大團圓で終結する。

このように、琉球寫本「寒徹骨」は、文體こそ白話から官話に置換されているものの、現在では失われてしまった繁本「寒徹骨」卷末の元來の面目を傳えるものとして、資料的にも大きな價値を有していると言えるであろう。

表2　琉球寫本・簡本對照表

◎尙志堂本（簡本）「寒徹骨」	◎琉球寫本『人中畫』「寒徹骨」第四回末尾
(1)自家拜別商尙書，回貴州營葬。	(1)自家拜別了商尙書，回去貴州埋葬。
(2)此時朝廷旨意，久到貴州，柳府產業，皆淸理交還。	(2)這時候，朝廷旨意，早到貴州，柳家產業，都交還他。
(3)劉恩先前到家，已暗暗將先老爺並夫人與至親骸骨俱已收斂。	(3)劉恩先前到家，暗々把老爺替太々仝至親骸骨，都停在丁房裡頭。
(4)春蔭一到家，滿城官員皆來迎賓。	(4)柳春蔭一到家，撫院、按院、知府、縣官，沒有一個不來迎賓，十分榮華。
(5)春蔭重新掛孝開弔。	(5)柳春蔭重新戴孝開弔。
(6)將父母安葬事畢，分付劉恩掌管產業，遂進京覆命。	(6)把父母埋葬事明白了，把產業盡行交付劉恩掌管，纔上京謝恩復命。
(7)後在紹興住家，直待商尙書謝世，服過三年喪。	(7)後來在紹興住家，直等到商尙書棄世，戴孝三年。
(8)扶持孟小姐兄弟登了科甲，方與孟夫人回貴州。	(8)孟小姐兄弟成人，又扶持他登了科甲，柳春蔭纔替孟夫人一起搬回貴州，料理舊時產業。
(9)生了二子，俱繼書香，自家官至尙書，	(9)孟夫人生了兩個兒子，都讀書，自家做官，直到尙書，轉陞文華殿大學士。
(10)扶持劉恩一子中擧人。	(10)劉恩二個兒子，也扶持他中了擧人。
(11)諺云，不是一番寒徹骨，怎得梅花撲鼻香。詩曰，……。	(11)俗語說，不是一番寒徹骨，怎得梅花撲鼻香，故此這題目，叫做寒徹骨。

實は、Cの東大本『人中畫』「寒徹骨」には、本文に校合の跡らしき書き込みが數多く見出される。最末尾については、琉球寫本(5)「柳春蔭重新戴孝開弔，把父母埋葬」に對し、頭注朱書にて「本板」と明示して「春蔭重新掛孝開弔，將父母安葬事畢」、さらにその左には、墨書にて「柳春蔭重復掛孝開弔，將父母安葬祖塋」と記す。末尾の「事畢」は、尙志堂(6)の冒頭二文字を追い込んで一文に解したもので、頭注朱書の「春蔭重新掛孝開弔，將父母安葬事畢」は、確かに尙志堂簡本との校合を示す。それでは、墨書「柳春蔭重復掛孝開弔，將父母安葬祖塋」は、何を示すのであろうか。或いはこれが、琉球寫本の基づいた、原繁本とも呼びうるテキストの一部なのではなかろうか。

東大本「寒徹骨」には、以下の通り、他に多くの頭注または傍注にての校合が見える。その內、ここと同樣に、一箇所に對して二種の異本を校合する部分として次の三例を見てみよう。

（A）第二回「每日早晚要到書房裡頭，看過一遍」[13]

頭注（墨）：故每日或早或晚必到書房中來看視一遍。（＝繁本に同じ）

頭注（朱）行間（朱）二箇所：故每日必到書房來（＝簡本に同じ）

（B）第三回「心裡還有好多不服，他悄悄到場裡，討出他的落卷來看，見上頭塗抹的批語」

傍注（朱）：心下許多不服，遂到場中，討出落卷來看，見上面（＝簡本）

欄外（黑）：本板云〇心下尙有許多不服，悄悄到場中，討出他的落卷來，看見上面塗抹的批語。（＝繁本に同じ）

（C）同「原來老師還不知道，孟學士死去年把了」

傍注（黑）：原來老師尙不聞知，孟年兄已作古年餘矣。（＝繁本に同じ）

傍注（朱）：原來老師尙不知，孟年兄作古年餘了。（＝簡本に同じ）

この三項を現行の繁本・簡本と照らし合わせると、これ

ら二種の異文が紛れもなく現行の繁本・簡本に該當することが明らかとなる（各條末括弧内にそれを記しておいた）。とするならば、上に引いた、最末尾の⑸に見える墨書の「柳春蔭重復掛孝開弔，將父母安葬祖塋」という頭注も、それが簡本のテキストではない以上、現行繁本では失われた原刊繁本の姿を留めるものである蓋然性は非常に高くなる。つまり、この「柳春蔭重復掛孝開弔，將父母安葬祖塋」こそは、已に佚書となった原刊繁本の、數少ない佚文となるのである。

なお、東大本が「本板」とするのが果たして簡本なのか繁本なのかについては、どうやら一貫した方針はなかったようである。前述の再末尾⑸で「本板」とされたのは簡本であるし、次の二例は、一種のみを校合する例だが、そこでは、（D）は簡本を指し、（E）は兩者が同文であるので判斷できず、また先の（B）の「本板」は、繁本であった。或いは、「中國板」という意味で「本板」の語を用いたのかもしれない。

（D）第一回「要得一個好地方去發憤讀書」
頭注（朱）：本板／必須擇一個好地方，發憤讀書（簡本）

（E）第二回「四書裡頭名實也有不相合的」
頭注（墨）：本板／四書中名實亦有不相合者（繁本・簡本同じ）

この東大本『人中畫』、特に「寒徹骨」には、他の卷よりも突出して多くの校合の跡が殘される。單に繁本または簡本などの中國白話文と琉球本官話文體との異同を記そうというのであれば、そもそも琉球本全編が白話から官話文體に置き換えられたものなので、校合自體が無意味な作業となる。校合を施された箇所は、どういう觀點において白話の再度の書き込みを必要としたのか、その書き込みを伴う『人中畫』テキストにより、琉球の通事は何を學ぼうとしたのか。この問に對する答えは現時點では未詳とせざるを得ないが、第三部で論じるとおり、通事にとって通事書とは、實用に足る知識と教養を學ぶための大きな據り所で

あった。この校合を記す注記自體も、何らかの新たな學びの場面が出現したこと（例えば、若干文言的な表現も學ばねばならない局面が生じた、等）を示すものであるのは間違いないと考えられる。

三　『人中畫』の成立⑭

（一）『白姓』成立に關わった集團

曾て拙論で述べたとおり、『白姓』の本文には、九人の久米村人が登場し、その主たる人物たちが皆蔡氏・鄭氏を中心とする密接な姻戚關係を有していた⑮。

文中には登場しないが、『白姓』林啟陞序文に、『白姓』の草稿を福州に携えて林門下にあったとされる青年も、「琉球國青年俊士姓鄭諱鳳翼者」とやはり鄭姓の若き學徒である。鄭鳳翼の名は現存の久米村家譜中には見出せないが、『白姓』中の濃密な姻戚關係を考慮するならば、やはり同じ鄭氏一門に列なる人物であったことは疑いを容れない。

『白姓』の現場に參集したのは、當時の唐榮の最有力者の一人であった蔡培（但し蔡培は一度も對話に參加していない）、その嫡男蔡楫と蔡培の娘婿らを中心にした若き久米村の通事や學徒であったが、蔡楫は當時まだ十五歳、實際の難民との對話や筆錄に大きく貢獻したのは、娘婿の鄭通事や阮崇基らであったと思われる。『白姓』の冒頭に登場し、長大な會話記錄を殘す鄭世道という學生も、家譜が殘らぬ爲どういう人物であったかは未詳ながら、恐らくは鄭通事や鄭天保、鄭鳳翼らと同族の若者であったのは間違いない。つまり實際のテキスト成立には、これら鄭一族の通事たちが大きな影響力を有していたと考え得るのである。

『白姓』中にこのように重要な足跡を殘す鄭氏を、家譜の系圖に基づいて分家の現狀を辿ると以下のような三家が浮かび上がる。

（1）　與座家鄭氏＝登場人物の鄭天保の家系
（與座家の支流に眞榮山家＝鄭鴻勳・鄭作霖。後述）

（2）　登川家鄭氏（及びその支流）＝登場人物の鄭通事
（鄭文鳳、蔡培の三女婿）の家系

（3）　池宮城家鄭氏＝鄭國樞（蔡培の五女婿）

これら鄭氏を中心とする一群は、當時恐らくは家學を基礎とした一つの「學門」集團を形成していたのではないかと思われる。

それをいま「學門（家學）」と呼ぶには二つの理由が有る。一つは、現存する琉球通事書に見られる言語特徴面での內部差異が語るものであり、もう一つは、現存する『白姓』諸本の傳承狀況である。以下、それぞれについて詳しく見て行くこととしたい。

（二）課本間に見える內部差異

琉球通事が學んだ官話には、否定副詞の用法からは、少なくとも二つの言語系統があることがわかっている。一つは、『白姓』に代表される官話で、否定副詞は「沒有」、他には「可＋VP」の疑問文や、連動・對象義の介詞「替」（現代中國語の「跟」「和」に相當）を頻用するなどの特徴を有している。もう一つの系統は、『學官話』『官話問答便語』の系統であり、それらの否定副詞は「不曾」「未曾」で、連同・對象義の「替」などは用いられない。[16]

A：『白姓』『人中畫』系

・已然體否定副詞に「沒有」、未然體に「還沒有」を用い、「不曾」「未曾」は用いない。

・「可＋VP」による是非疑問文を使用する。

・連同・對象を表す介詞や連詞の「替」を多用する。

B：『官話問答便語』『學官話』系

・基本的に、已然體否定副詞に「不曾」未然體に「未曾」を用い、否定副詞「沒有」の機能は未發達である。

・「可＋VP」疑問文は存在しない。

・介詞「替」は、受益者を導く用法のみを有し、連同・對象は表さない。

『白姓』と『學官話』『官話問答便語』との間に、このような言語特徴の相違が生まれたのはなぜであろうか。もちろんそれは時間的な違いであるかもしれないし、何らかの地域的違いが反映しているのかもしれない。『白姓』は、山東人と蘇州人を相手に交わした會話がその基礎となっており、『學官話』『官話問答便語』は福州滯在中の用途に特

化したテキストである。自ずから用いる言語は異なっていたと理解することも可能である。しかし、ここで注意したいのは、これらのテキスト、少なくとも『白姓』と『官話問答便語』がほぼ同時期に學ばれていて、どうやらその學習主體は相互に異なる、獨立した集團であったと推測されることである。[17]

後の時代には、これら數種類の課本は久米村にて廣く學ばれ寫本も作られた。しかしながら、課本そのものが成立した當初の一時期、これらは家族や姻戚關係など、比較的閉じた集團内で學ばれたのではなかったか。『白姓』の本文が、家庭内の事情など極めて個人的内容を厭わずに記すのも、使用範圍が親戚内に限られていてこそ可能となるのではなかろうか。

（三）『白姓』諸本と學門

二つめの理由は、現存する『白姓』諸本の傳承狀況である。

いま、『白姓』には管見の限り七種類のテキストが存在する。

1. 天理大學圖書館藏『白姓官話』（封面『白姓』、序文と末尾の呈文を缺く）
2. 京都大學文學部（中哲文）藏『白姓』（『人中畫』全五册之一。「敦厚堂」の印記有り）
3. 京都大學文學部（日本史）藏『白姓』（封面に「池宮城親雲上」の署名有り）
4. 石垣市八重山博物館藏『白姓問答』
5. 石垣市八重山博物館藏『白姓』（同治十三年手抄）
6. 沖縄縣立博物館藏『白姓』
7. 關西大學圖書館長澤文庫藏『百姓話』（長澤規矩也舊藏書）

これらの内、2の京大文學部（中哲文）藏の『白姓』は、序文も含めて完全なテキストであるが、注意すべきはそれが、『人中畫』内の一本として同じ帙内に收められることである。7の關西大學藏本は、長澤規矩也氏舊藏書であるが、書名を『百姓話』とすることからわかるとおり、『白

姓』成立の由來を理解しない後世の人物により抄寫されたものであるのは間違いない。

一方、八重山博物館の4『白姓問答』は、やはり序文を具え、筆寫の字も美しく詳細な頭注をもち、相應の來歴をもつテキストと推測されるのだが、この八重山博物館には『白姓』以外にやはり『人中畫』の「自作孽」一卷が傳承し現存している。[18]『官話問答便語』『學官話』は、現在知られる限り八重山への傳承は確認されていない。

さて、京大本『白姓』がこのような『人中畫』と同帙に收められる事實は何を意味するであろうか。それを解く鍵の一つは、兩者が共通して持つ言語的特徴にある。

話本小説『人中畫』の中國刊本は、否定副詞はすべて「不曾」「未曾」系統を用いているのだが、琉球の通事は、白話から官話への翻譯に際し、それらの否定副詞をすべて「沒有」に變換している。この事實は、夙に佐藤晴彦氏により指摘されているが、[19]今回、再度用例を調査したところ、僅か二例を除き、すべて「不曾」「未曾」から「沒有」へと置き換えられていることが確認された。下にその實例を一部列擧することとする。

（1）（嘯）「（尚）未」→（琉）「（還）沒有」

1a（嘯）一路上，遇着的朋友見他少年未娶，都誘他到花街去玩耍。

1b（琉）一路上，遇着的朋友見他後生沒有娶老婆，騙他去婊子家玩。（『風流配』第一回）

2a（嘯）不期心愈急，文思愈枯，到此時尚未完章，……。

2b（琉）不想心越急越做不出來，到此時草稿還沒有完，……。（『風流配』第一回）

3a（嘯）其人未見，其才實仿佛老太師閏中之秀。

3b（琉）人我沒有看見，他的才實替老太師女兒都是一樣。（『風流配』第四回）

4a（嘯）商兄幽怨未伸，不敢先父母而言親。

4b（琉）你的冤仇沒有报，不敢忘父母說親事。（『寒徹骨』第二回）

5a（嘯）既是他令愛未嫁，這還好。
5b（琉）既是他女兒還沒有嫁，這還好。
（『寒徹骨』第二回）

（2）（嘯）「不曾」→（琉）「沒有」
6a（嘯）司馬兄因有貴恙，不曾终場，所以見屈。
6b（琉）司馬兄因那天有病了，沒有講過三場，所以不中。
（『風流配』第一回）
7a（嘯）晚生今日也是無心中看見，不曾問的。
7b（琉）我今日也是無心看見的，沒有問个實的。
（『風流配』第三回）
8a（嘯）司馬公也不曾來。
8b（琉）司馬公也沒有來。
（『風流配』第三回）
9a（嘯）張老兒看見二人驚訝，方知眞不曾娶。
9b（琉）張老頭子看見他两个人慌張，才曉得眞眞沒有娶。
（『風流配』第三回）
10a（嘯）老爷雖不曾來，司馬相公却是來的。
10b（琉）老爷雖沒有來，司馬相公是來的。
（『風流配』第三回）
11a（嘯）商春蔭低着頭看書，就像不曾聽見的一般。
1b（琉）商春蔭低頭看書，就像沒有聽見的一般。
（『寒徹骨』第二回）

（3）（嘯）「（尙）未曾」→（琉）「（還）沒有」
12a（嘯）故此尹姑娘今年一十七歲，尙未曾許與人家。
12b（琉）故此尹姑娘今年才十七歲，還沒有配給人。
（『風流配』第二回）
13a（嘯）探花雖未曾訪，我學生到替探花訪得有些消息在此。
13b（琉）探花你沒有去查訪，我到替你訪，有些消息在這里。
（『風流配』第四回）
14a（嘯）轉路來，想是還未曾夜飯。
14b（琉）走路來，想是還沒有吃晚飯。
（『自作孽』第二回）

また、介詞「替」の用法も、『白姓』と同じく「對象・連同」を示す用法を見せる。

那里曉得就替你女兒韻腳一樣。（風流配第一回）
呂翰林在尹家定了親，回到家替司馬玄賀喜說。

（風流配第三回）

會接他來一看，替他比比才學。

（風流配第三回）

このように、否定副詞と「替」の用法において『人中畫』と『白姓』は同一の特徴を有し、『學官話』『官話問答便語』の體系とは一線を畫すのである。

先にも述べたとおり、京都大學文學部（中哲文）藏『白姓』は、『人中畫』と同じ帙に收められ、書寫の筆跡や書型なども完全に一致する。この『人中畫』全四冊と『白姓』一冊には、すべて「敦厚堂」という印記があるのだが、「敦厚堂」とは、眞榮里家鄭氏九世良弼（乾隆五十四年生）の室名で、『白姓』の登場人物鄭天保の家系たる與座家鄭氏の同門支流の一つである（與座家五世士綸の第五弟士紳を筆頭とする家系）。また、同じく日本史藏本は、表紙に「池宮城親雲上」の書き込みが見え、まさに前述の蔡培第五女婿鄭國樞の池宮城家鄭氏舊藏に係ることがわかる。

また、八重山博物館藏の二種類の『白姓』のうち、序文も卷末呈文も完備した『白姓問答』は、難讀字への直音注や白話混じりの頭注を備えた良質の寫本である。筆跡も明らかに古い手に屬す。先にも述べたとおり八重山博物館には『人中畫』のうち「自作孽」が傳わっていて、ここでも『白姓』と『人中畫』の傳承が重なり合う。

これら貴重な諸本が、どのようにして八重山へ傳承したのであろうか。その手がかりが、八重山士族『上官姓系圖（筆頭）六世正儀』八世正恕（八重山初代通事職の一人）の家譜に見える。それによると、彼は乾隆三十九年久米村に留學し、鄭作霖伊良皆通事親雲上の門下にて官話の習得に日夜努力したとある。歸國に際してその勤勉さを稱えられた正恕は、師の鄭作霖から「祕傳書四部」を授けられている。この鄭作霖なる人物は、は眞榮里家鄭氏の七世で、京大文學部（中哲文）『白姓』の所有者であった鄭良弼（敦厚堂）の祖父に當たる。鄭作霖が正恕に與えた「祕傳書四部」が何であったかは明らかにされないが、その中に『白姓』と『人中畫』が含まれていた可能性は決して低くはないであろう。「四書五經」など通常の漢籍であれば「祕傳

書」と銘打つ必要はない。[20]

このように、現存する『白姓』諸本の狀況は、その成立と傳承が『人中畫』と密接な關わりを有していたことを示唆している。否定副詞などの言語面で、この兩者が同じ特徵を共有することも、その推測を補強する。

四　おわりに

『人中畫』の白話文體を官話に翻譯した集團については、いまそれを直接傳える資料は存在しない。しかし、現存の官話課本諸本のテキストで、同じ言語體系で執筆されるのが『白姓』のみであること、しかもその成立には、連日白氏ら難民のもとに官話學習に通った、鄭氏一族を中心とする若き學徒が深く關わっていたことは、『人中畫』翻譯を手がけた集團がどのような學門系統にあったかを考える手がかりとなる。いや寧ろ、彼ら鄭氏一族にしかこのような翻譯は不可能ではなかったか。

『白姓』には次のような難民と學徒らとの會話が記錄される。

1（難民）　弟這裡還有替通事點的書，今日帶去不帶去。
（鄭通事）點完了麼？
（難民）　還沒有點完。
（鄭通事）沒有點完，把那點了的給我帶去，還沒有點放在這裡，等點完了，小舅蔡克愼不時常來，交給他轉寄給弟。費兄的精神，再來拜謝。

2（難民）前日令姐夫鄭通事留有几本書在這裡點。如今點完了。蔡先生順便帶去，寄還給他好麼。
（蔡楫）昨日見家姐夫，也替我說過。先生這裡替他點的書，既然點完，小弟帶去還他。好不過的。家姐夫還有話托小弟說，有勞先生，另日面謝不盡。
（難民）好說。煩勞兄臺，替令姐夫說一聲，弟所點的，差錯處狠多，不是弟不盡心，弟因見識有限，不要見怪。看有不着所在，自家更正。

ともに、鄭通事が難民に何らかの書物に點を打つこと、もしくは點檢を依賴し、それを最年少の義理の弟蔡楫（克愼）が引き取りに來るやり取りである。もちろんこの書物

が何を指すか、本文中には一切明らかにはされない。ただ、その書物は複數册に及び（「留有几本書在這裡點」）、必ずしも簡單には片付かない作業であったこと（「弟所點的，差錯處狠多，不是弟不盡心，弟因見識有限，不要見怪」）は、この會話からうかがえよう。先に論じたような『白姓』と『人中畫』との密接な關わりを考えると、この點檢（もしくは加點）を依頼された書物は、或いは『人中畫』全五卷ではなかったか。この推測が正しいかどうか、現時點で結論を下すには到らない。しかしながら、乾隆初のこの時代、久米村には最初の漢文組立職が置かれ（乾隆七年）、國の歷史書である『球陽』の編纂が始まっていた（乾隆十年）。官話及び漢文への高い能力を期待する學問的機運の中、家學を基礎として官話習得にしのぎを削った久米村の若者達の手によって、これらの通事書が成立するのも、いわば當然の時代の流れであったのかも知れない。

註

① 拙論「琉球編纂の官話課本に見る「未曾」「不曾」「沒有」——その課本間差異が意味すること——」（『中國語學』二五一、二〇〇四年）、「『白姓』の成立と傳承—官話課本に刻まれた若き久米村通事たち——」（『東方學』一一五、二〇〇八年）を參照のこと。

② 現中華書局資料室藏。路工編『明清平話小說選』第一集（古典文學出版社、一九五八）、及び『中國話本大系』「珍珠舶等四種」（江蘇古籍出版社、一九九三）に、排印出版される。

③ 內閣文庫（國立公文書館）藏。乾隆四五年刊本。いま『古本小說集成』（上海古籍出版社、一九九〇）、『古本小說叢刊第三六輯』4（中華書局、一九九一）に影印出版。

④ 簡本では、植桂樓刊本が「唐季龍傳奇」「李天造傳奇」「柳春蔭傳奇」、尙志堂本が「唐季龍」「李天造」「柳春蔭」とするなど、共に主人公の名を取って標題に變えている。後に述べる京大本も、封面には主人公の名を併記し、本論文第四部第三章で紹介する宣教師ベッテルハイムと通事達の往復書簡の中にも、通事がこれら『人中畫』の篇名を主人公の名で呼ぶ記事が見られる。

⑤ 拙論「ベッテルハイムと中國語」（『同志社女子大學總合文化研究所紀要』一九、二〇〇二年）にその一端に言及した箇所がある。

⑥ 「狹路逢」を除く四篇と、「白姓」を合わせて全五卷が一帙に收められる。

⑦ 朴在淵「關於完山李氏《中國小說繪模本》」（『'93中國古代

小說國際研討會論文集』開明出版社、一九九三、四九三～五二一）、同氏編『中國小說繪模本 附：韓國所見中國通俗小說書目』（江原大學校出版部、一九九三）。また、同氏「關于尹德熙的《小說經覽者》」（『第二屆中國古代小說國際研討會論文集』、二〇〇二、四九二～四九六）。

⑧　朴在淵氏の前掲論文、「關於完山李氏《中國小說繪模本》」五〇七頁に、「還有人中畫的一篇〝寒徹骨〟見于伽藍李秉歧原藏朝文書目，可見過去《人中畫》也可能翻成朝文」という。

⑨　金文京「漢文文化圈の提唱」、小峯和明編『漢文文化圈の說話世界　中世文學と隣接諸學1』竹林舍、二〇一〇年。金氏の着眼點は、「漢文訓讀」により、中國周緣諸地域に多樣な書面文化が熟成されたことにある。明淸の中國周緣地域には、その「漢文圈」に準ずる形で「官話圈」とも呼びうる言語文化圈が形成されていたと筆者は考える。話本小說の傳承にともなう、各地域の多樣性は、まさにその多樣な言語表現の一つの端的な表れであろう。

⑩　「自作孽」のみを缺く東大本の筆跡と八重山博物館藏「自作孽」を比較したところ、東大本の一部（「風流配」）と、近い手で筆寫されていることが明らかとなった。板型もほぼ同じである。或いは、本來『人中畫』全五卷は八重山に藏されていたものが、何らかの理由で「自作孽」のみを八重山に殘し、他は獨立して東渡したものであるかもしれない。この點については、今後さらに考察を進める必要がある。

⑪　原文は以下の通り。

　該得矚目的是，嘯本《寒徹骨》結尾一段文字反較尙本《柳春蔭》爲少，內容也不盡相同。經考，寒徹骨位於嘯本全書之末，其最後一葉字跡草率筆劃單弱，與全書刻工風格明顯不同，疑是值本該本刷印時，其藏板中最後一、二塊或損壞遺失情況，而重新雕板一塊。今天所見最後一葉，字已刻滿，末行僅有一字之空，則原刻必不止此。重雕板時爲省一、半塊板之勞，經過計算，削足適履，將文字壓縮，雕滿一板卽草草結束，致使『故曰寒徹骨』之結語五所從來，而『孟尙書』之稱亦不見前文（孟官拜春坊學士，書中以孟學士或孟老爺相稱），可見重雕板時草率從事，功虧一簣。植桂樓刊本等簡本《人中畫》，縮寫中所據底本當是嘯花軒刊本的原印本，故有了差異。今將尙本《柳春蔭》結尾有差異的一段照錄如下，以資讀者辨識：

　……（省略）……

　此段雖亦經縮寫，但當比嘯本此段更接近原貌，讀者可與正文比較。

⑫　東大本はこの部分に「一」を傍記する。

⑬　この部分については、京大本「寒徹骨」も、「板見」として同じ繁本の「故每日或早或晚必到書房中來看視一遍」を朱書頭注にて書き入れる。

⑭　李煒；李丹丹「從版本、語言特點考察《人中畫》琉球寫本的來源和改寫年代」『中山大學學報（社會科學版）』（二〇〇七―六）も、文中の語彙等から『人中畫』が『白姓』に近い

時代に成立した可能性を指摘する。

⑮ 注①所掲の拙論「『白姓』の成立と傳承――官話課本に刻まれた若き久米村通事たち――」。また、中國難民側で會話に登場するのは、山東人白世雲と蘇州人瞿張順、また病のため收容施設にて逝去する朱三官の三人の名が確認できる。

⑯ 注①所掲の拙論「琉球編纂の官話課本に見る「未曾」「不曾」「沒有」――その課本間差異が意味すること」を參照のこと。

⑰ 注⑯の拙論、及び拙論「赤木文庫藏『官話問答便語』校注（稿）」（『沖縄文化研究』三一、法政大學沖縄文化研究所、二〇〇四年）。

⑱ 前節でも述べたとおり、『人中畫』のうち「自作孽」のみを缺く武藤長平氏舊藏の東大本と、傳承上何らかの關係を有するかも知れないが、それについては今後檢討を加えていきたい。

⑲ 佐藤晴彦「琉球官話課本研究序説――寫本《人中畫》のことば（1）」（『人文研究』三〇―一、二五～三九頁、一九七八）。同「琉球官話課本研究序説――寫本《人中畫》のことば（2）」『人文研究』三二―四、四七～六八頁、一九八〇）。

⑳ 同（乾隆）三十九年甲午、奉　憲令、爲學習官音事、駕夏立地船、六月二十三日石垣港開船。……於二十五日稟明　朝廷乃遵奉　上司憲令、奉請久米府唐榮鄭氏伊良皆通事親雲上諱作霖公、日夜攻學官音併雜案、至翌年三月間、已講究四聲平仄等。既蒙授賜先生祕傳書四部、乃稟　朝廷請回藉［籍］。朝廷恃令久米府總理司長史等官、考較正恕所學官音通否。於四月初四日奉　總理司等官命令、出明倫堂面考所學之官音併雜案。乃總理司轉稟　朝廷、正恕所學以當達譯用、仍恩准回藉、恃蒙賜　憲諭矣。

『上官姓世系家譜小宗（筆頭六世正儀）』八世正恕の傳

これら、八重山の官話通事と鄭氏一族との關連については、拙論（「官話の漂着――乾隆年間八重山における「官話」の傳播」、『東と西の文化交流』、關西大學東西學術研究所、二〇〇三）にて詳述したので、參照されたい。